

東南アジアをくくる論理 と世界単位

立 本 成 文

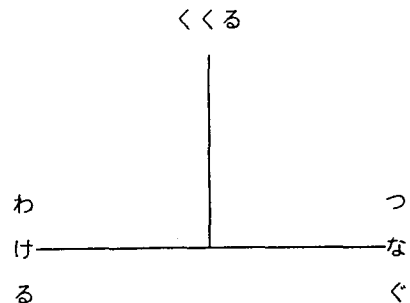
I. 地域にこだわる

社会学は比較的若い学問である。それが学問として認められる努力をしていた時期には、社会とは何かという議論が熱心に行われた。社会学者の数だけ社会の定義があるとも言われ、社会実在論と社会名目論とが相対立して社会の概念を云々するのは不毛の議論だとさえ断定されることもあった。地域研究における「地域」の議論は、社会、文化などといった内容のはっきりしない概念を議論するのと似たところがある。地理学の地域概念も同じような歴史をたどっている。しかも地域というのは、地図の影響もあって、空間的な広がり限定されやすい。一度地図の上に線を引いてしまうと、その空間的、視覚的呪縛から抜け出すのがむづかしいということである。

一般的に「地域」とはどの範囲を指すかについて議論を行うことは最も無味乾燥で実りのない議論である（坪内良博）という意見があったとしても、地域研究と称するからには主題である地域（例えば東南アジア）という枠組みが意味のないものであると一蹴するわけにはいかない。地域というのは共同研究のための知的枠組みに過ぎないというのであれば、既存の学問分野の寄せ集めにしか過ぎず、地域研究という言葉をごようぎょうしく使う積極的な意味はなからう。だからといって、単なる空間的範囲を問題にするならば、それは地理学や歴史学がしてきたことと変わらないことになる。そのようなスタイルの地域研究は認められないというのではない。が、もう少し地域研究という言葉にこだわって、真剣に地域研究に取り組んでみようという立場に立たなければ、地域研究という看板は下ろした方が良いということである。この二つの道の分岐点には、地域という全体を意味あるものとして見るかどうかという研究の視座が大きく関わっているのである。

ヨーロッパ、中国、インドなどのように一見歴史的にまとまりのあるところでは、あえて地域という全体にこだわらなくとも、細分化された諸科学がすべてを処理しているように見える。ところがアフリカの諸地域、東南アジア地域などは一見そのような歴史的なまとまりのないところであり、だからこそ地域研究を必要としたともいえる。そのような言わば地域研究から見れば受身の立場は、言い換えれば、文明のはざまの地域研究、落ちこぼれを拾って行く残余研究、非西洋文化を西洋の概念で切ってしまう研究に過ぎないものに終わってしまうことにもなりかねない。そこから開き直って、現在の東南アジア地域研究は、地域としてあいまいであるが故に、それを何らかの形でくくってみると、新しい見方が得られるのであるという主張をし

ている。さらには、この手法によって「地域」の明らかないゆる文明圏を地域研究の対象として逆照射することが可能であり得ようし、ひいては学問、とくに人文社会科学の活性化、再構築にもつながることが期待されている。言い換えれば、よく地域研究になじみやすい<学問領域>や<地域>があるとい



われるが、そのなじみやすさを問い直すということでもある。地域としてまとまりがないから地域研究を必要とし、分化してしまった分析的な科学よりは、全体現象にこだわる未分化の学問の方が地域研究に有効であるといった見下した判断・評価を逆手にとって、新しい地域概念、新しい学問領域を開拓しようということである。

II. 東南アジアをくくる

それでは、東南アジアはなぜ地域としてひとつにくくられねばならないのか。そのための論理を考えてみよう。この論理は、もちろん比喩的な意味での、事物の法則的なつながり、現象を合理的・統一的に解釈する上に認められる関係のことである。

東南アジアを理解しようとする時に我々は「フロンティア空間」「小人口世界」「小型家産制国家」「ネットワーク社会」「海域世界」あるいは「森の文明」などという類の概念を使う。これは、東南アジアを他の地域から区別した時にどのような理解・解釈の枠組みが可能かという問いにそれぞれの研究者が大局的に答えようとしたものである。これらの概念をくわける論理><つながり論理><くくる論理>の三つの筋道（ベクトル）から考えてみよう。

わける

他と区別するというのは理解の第一歩である。分けるということは分析することでもあるが、分かることでもある。その分ける枠組みが研究者の枠組みではなく、その地域固有の分け方であることが地域研究のひとつの存在理由であることは異論のないところであろう。他者のまなざし、解釈枠組みによって見る、そしてそれはとりもなおさず、他者の視線で自己を見直すということでもある。地域の人々が固有に持っている論理・理論ということで、この解釈枠組みを一次モデルと呼んでおこう。東南アジアにおける地域の一次モデルは、決して東南アジア全体といったものではなく、もっと小さく分けられた単位である。「小型家産制国家」というの

はこのような小さい単位を指したもののひとつである。いわゆる家産制国家ほど大きくはなり得ない小規模な国家という意味で小型というのであるが、これは土地よりも人を獲得して人の支配でなければならないという「小人口世界」の論理にもつながる。

東南アジアの一次モデルとして、前田成文は(1)社会は同心円のように境界が重層していて、境界のあいまいな圏的な構造であること、(2)人間関係において対人主義であること、(3)カリスマ的なリーダーシップが基底として働くことの三つの組織原理を指摘した。一次モデルとしての社会単位が小さいものであり、東南アジア全体などという枠組みは成立し得なかったということである。東南アジアが「フロンティア空間」であるというテーゼはこの組織原理と密接な関係にあるようにも考えられる。フロンティアというのは、中心と周辺から見てその外にあるということで、東南アジアは東と西との交易の中心のネットワークをつなぐ空白地帯というイメージが強いが、フロンティアの中にも、中心と周辺とフロンティアとが重層的にある。むしろ一次モデルとしては、常にフロンティアとなる空間があり、フロンティア精神のような動機に裏づけられていることが大切であろう。それは、単にフロンティアを自分の生活圏の外に求めるだけではなく、内にフロンティアを作っていくという営みにも結びつく。「ネットワーク社会」というのは、対人主義が通底する社会を便宜的にそう呼んだものであるが、次の〈つながり論理〉にもつながるものである。

つながり

東南アジアは小さな単位（当体）からなっているという一次モデル的捉え方は、余り異論のないところであろう。その単位が何であるかということについては、例えば古川久雄や高谷好一の生態学的な区分や、矢野暢の伝統的国家類型であったりする。あるいは、エトノスであったり、範型となる都とそのミメシスを希求する町や村であったり、都と都との曼陀羅模様であったり、コミュニティであったり、対人であったりする。ところが、東南アジアはその小さな単位が一つ一つばらばらにあるのではなく、間柄としてつながっているところに特色がある。そのつながり方には三つが考えられる。

(1)つながりとなるものが単位の内にある場合、これは家族的類似の連鎖となる。少しずつ違った類似によって次々と連なっていくのである。それを研究者がどこかで切ることによって、大きくくくすることも可能である。山地世界に住むエトノスの連鎖が例となる。

(2)単位がシナプシスのような関係手を出していて、関係を結ぶことによって単位の存在意義が生じる。単位がその存在を主張できるのは他の単位と関係を持った時だけである。これは

対合の論理といってもよい。対人主義はまさしくこの型のつながり方であるが、交易ネットワークもこの例である。

(3)大文明から見れば、東南アジアは東と西のつながりである。そして、その中の単位も一つ一つがつながりとなりうる。この時のつながり（繋ぐもの、触媒）は、つながれるものとは別の当体である。つながりがあるからつながれるのである。フロンティアの概念もひとつのつながりで見れないことはない。ディアスポラ、メスティーソ、都市もつながりとして考えられる。

もうひとつ、鏡像理論も考えられる。沢山の鏡がお互いを照射し合って、そのイメージに沿って自分を作り上げる状況である。マンダラ国家論などはこの論理に基づいているとも考えられる。この場合は、比喩的に言えば鏡がつながりの役を果たしている。しかし実際には鏡はないわけで、むしろ範型を想定すべきであろう。範型が鋳型として形相を規定していると共に、つながりとしても働いているということである。

いずれにしても、つながり論で地域を空間的にあるいは時間的に見るかぎり、おそらくは不連続性を見つけるのが大変むづかしい。それ自体では決して境界というものを考えられないのである。しかし、東南アジアというのはそのような世界でもある。

くくる

それでは東南アジアを大きくくくる統合的論理はないのかといえば、一次モデルとしてはあり得なかったが、第三者の（メタ）審級としての二次モデルとしてはあり得る。東南アジアをくくらねばならない必然性（必ずそうならなければならないという論理）はとりあえず三つ考えられる。

(1)生態力学的な場の論理である。Eco-logicといってもよい。「フロンティア空間」というのもある程度はそうであるし、熱帯の海と熱帯雨林とによって構成される「海域世界」、あるいは森林に力点を置いた「森の文明」もそうである。人間の活動とその生産物をも含めた、広い意味での生態環境がひとつのまとまりある単位として取り扱われることを主張するのである。いわば、地域が作用因としてのagency（当体）を構成すると見るのである。もちろんガイア仮説ともつながる理論である。その違いは地球をひとつとしながらも、実は分かれているのだ、分けなければならないと考えることであろう。くくる論理とわける論理とは表裏一体のものである。

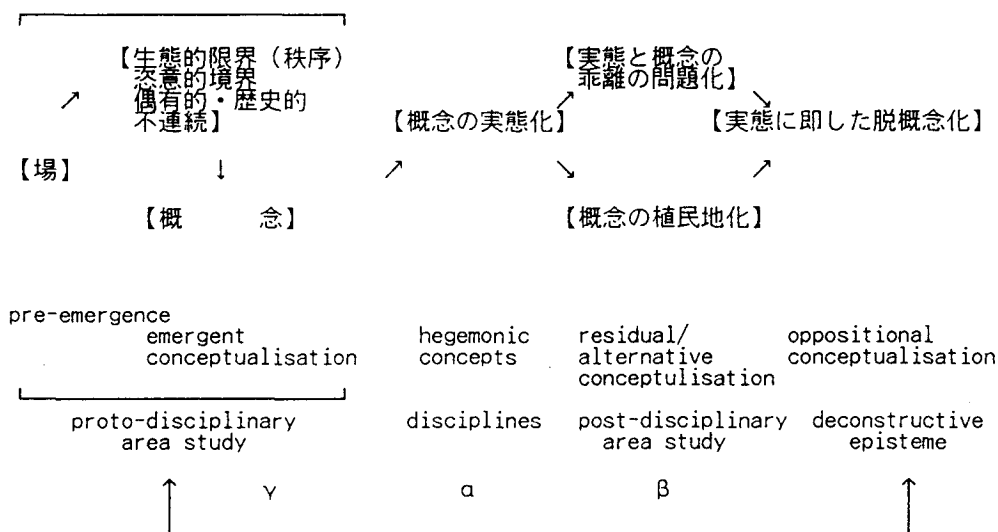
(2)メンタリティとか、ハビトゥスの同一性によって地域をくくることがある。これは、研究者の研究戦略上の理論的要請による。一般に、地域性、固有性という議論は、研究者が必要

とする研究戦略のための論理である。東南アジアを、銀河系のような星雲系と捉えたり、ひとつのマンダラと見たりするのも同じである。「外文明と内世界」という対概念もこのジャンルに入る。ただし内世界をジャワ世界とかタイ世界あるいはバドゥイ世界というように分けて見ればそれは一次モデルであろう。しかしそれらを越えて東南アジアワイドに、外と内との境界を引いて内世界を語るのは研究者の戦略に過ぎない。外と内というのは基本的には分ける論理であって、たくさんのがくくられる原理にはなりにくい。内世界と外文明という二項対照概念は、国家のように何らかの規準でくくられている内容を内世界として強化・補強する論理である。

すべての概念は人がくくることによって存在するという観点から見れば、すべては研究戦略の論理に還元されないこともない。たとえば、生態環境自身が主張することはない。その声を聞き、気を感じたと言うのは研究者である。その意味で生態力学的な場の論理も、研究戦略の論理のひとつとみなされるかもしれない。しかし、ここで言う研究戦略と言うのは、地域を構成するための理論的要請に基づいて概念を操作することである。同語反復的な言い方になるが、地域研究の論理なのである。皮肉な言い方をすれば、地域研究をするために地域をくくると言う論理を探してくるということである。したがって、言語の系統を立てて、例えばオーストロネシア語族という風にまとめたり、人種・エトノスですべてを割り切ろうとするのは、ディシプリンの論理であって、地域研究ではなくなる。

(3)世界秩序の理想によって東南アジアをくくらねばならないとする論理である。全体秩序を維持してきた近代的な論理には、資本主義、官僚制度、国家、民主主義、法などがある。カースト制度は、浄・不浄観念によって分けることを徹底することによって、それをあらためて階層的にくくっている独特な論理と言える。いろいろな統合原理をあらためて見直して、あるべき秩序の姿を問い、新しい全体を構想する、それが「世界単位」の概念である。一次モデルとしてはおそらくは文明と言いつわされているものであろう。生態・社会・文化をくくった単位である。それを文明と叫ぶのは、従来の文明概念が引きずる西洋中心の進化論的な見方を避けて、一次モデルの文明として確立していないものまでをこの概念で切ろうとするからである。

世界単位というのは、必ずしも空間的な広がりだけではない。むしろ、地域という空間的な広がりを場としてそこに現成されるできごとを解釈して抽出される概念である。したがって、世界単位が地域に地域としての意味を与える。世界単位を成り立たせるものについては、前田が生態環境、社会制度、文化表象の三極構造として見る提案をしている。その際に、階



統的な論理だけでなく、生態力学的な述語的統合や下位の単位が上位のレベルを支配することもあるというヘテラーキー（heterarchy）な構造がむしろ重要となろう。世界単位というのは、場とできごととの循環の上に構成される生態的關係体であって、単なる空間的地域区分ではないということは大切である。

世界単位の境界はあいまいで、重層的と捉えるほうが実態に則していることもある。しかしそれではやはり中心と周縁の分け方になり、せっかく周縁からの視点を主張する世界単位の概念が生きてこない。自己を中心とした同心円的な重層性を個々の要素については認めないわけではないが、世界単位としては重層性を認めないほうが良い。ひとつには世界単位は述語的論理による統合によって構築されたものである。ひとつひとつの要素が世界単位の一部となる決断を下していることが（一次モデルとなった時の）世界単位成立の条件である（二次モデルの場合には説得すれば分かってくれるという期待がある）。二つには、その構造がヘテラーキーであるから、周縁の要素だけでなく中心の要素も流動するということである。単に周縁の重層性が問題となるのではなく、構造自体の再自己組織化が常に問われるということではなければならない。

東南アジアは、このような世界単位として問われねばならない。そのうえで、地球世界をもう一度世界単位によって切ってみる作業が要請されるであろう。多くの人が納得する最適の単位、それが世界単位でなければならない。それを主張するのは、主宰者としての地域研究者で

ありたいものである。くくる論理に、第三者の審級という言葉を使った。これは、大澤真幸によれば、神であり、宗教の起源としても考えられる。地域研究者が神であり得るかどうかは疑問であるとしても、地域研究者の二次モデルが一次モデルになるという希望は大きいのである。

東南アジアの世界単位は、単に世界秩序の論理だけではなく、幸いにして、研究戦略の論理、そして生態力学の論理による必然性と重なるところに特色がある。研究戦略としての東南アジア地域研究が、生態力学的なまとまりに注目することによって、世界秩序の論理を主張しているということである。

Ⅲ. そして…

地域研究というのは、すねて言えば、学問に行きづまった人が集まってきて、「地域」という枠組みの中で新たな境地を求めようとする営為である。もともと自分を育ててくれたディシプリンを捨てた人もあろうし、ディシプリンを深めようという人もあろうし、それを越えようと努力する人もあろう。ともかく既存のディシプリンでは捉え切れない問題に取り組むことによって新しいパースペクティブを求めようとするものである。地域研究はこのような営為の止まるところを知らないアリーナであり、研究のフロンティアであり、未完のプロジェクトである。地域研究は本質的に、教師が分かっていることを生徒に教えるような教育の場にはなじまないとも言える。地域研究というカリキュラムができた時には、地域研究はもはや無用の学問となるか、あるいは新しい旅路に再出発しなければならない時であるかもしれない。少なくとも、地域の固有性、述語的論理に基づいた理論が、出生の秘密を忘れてディシプリンとして普遍性を主張して、他地域の固有性を覇権的に抹消するのは地域研究の本来の精神に反する気もする。しかし、もしも沢山の人に受け入れてもらえる人類の叡智のようなパラダイムが生まれ出れば、それはそれでめでたいことである。この間の事情を図式化すると図のようになる。

(図中の α 、 β 、 γ については『地域研究の手法』参照。)

参考文献

- ・古川久雄「大陸と多島海」『東南アジアの自然』（講座・東南アジア学2）弘文堂, 1990.
- ・前田成文『東南アジアの組織原理』勁草書房, 1989.
- ・大澤真幸「混沌と秩序—その相互累進」『社会システムと自己組織性』（岩波講座・社会科学の方法10）岩波書店, 1994.
- ・佐藤俊樹『近代・組織・資本主義—日本と西洋における近代の地平』ミネルヴァ書房, 1994.

-
- ・ 高谷好一『東南アジアの自然と土地利用』勁草書房, 1985.
 - ・ 矢野暢編『地域研究の手法』（講座・現代の地域研究 1）弘文堂、1993.
 - ・ Kontopoulos, Kyriakos M. 1993. The Logics of Social Structure. Cambridge University Press. ・
 - Turner, Stephen. 1994. The Social Theory of Practices : Tradition, Tacit Knowledge and Presuppositions. Polity.

〔附記〕

前もって第 1 回参加予定者に配布した資料に、合同研究会の後で若干の訂正を加えたものである。

本稿は重点領域研究季刊誌「総合的地域研究」第 6 号に掲載したものと同じであることをお断りしておきたい。